



上向台小だより

10月号
西東京市立上向台小学校
令和4年9月30日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

「ほめる」から「認める」へ

校長 町田 元彦

校長室の窓からは、さわやかな秋風とともに、体育発表会の練習に一生懸命取り組む子どもたちの声や、心地よい音楽が聞こえてきます。

10月15日(土)は体育発表会です。今年度は、全学年「全員リレー」と「表現」の発表を行います。私たち教職員は、体育発表会までの取組を通して、子どもたちが積極的に挑戦する姿勢をしっかりと支えていこうと考えています。

ところで、子どもたちが何かに向かって挑戦しているとき、私たちはよく「ほめる」とか「認める」ということをします。この「ほめる」と「認める」ことを子どもたちはどう感じているのでしょうか。大人は、「ほめる」と「認める」ことは同じという感覚でしょう。しかし、「認めてほしい」と思っている子にとっては、「ほめられてもうれしくない」と感じる時があるようです。

大人が子どもを「ほめる」ときは、一般に大人の基準や水準で「ほめる」ことが多いように思われます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、ほめることはまれでしょう。

それに対して、子どもが「認めてもらいたい」時というのは、一般に子どもの基準や水準で「ほめられたい」のではないのでしょうか。大人の考えた基準や水準に達していなくても、子どもなりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。

大人は子どもをほめようとする、どうしても「評価」になりがちです。私たち大人が意識すべきことは、「評価」ではなく、ポジティブな「認める」言葉かけをすることだと思います。

岸田雪子氏の著書『スウェーデンに学ぶ「幸せな子育て」子どもの考える力を伸ばす聴き方・伝え方』をもとに、「ほめる」を「認める」に変換する5つのポイントを紹介します。

Point1 子どもが「やったこと」をそのまま認める

新しい世界を日々広げる子どもたちが「やってみたこと」そのものを「認める」。

●「難しい漢字に挑戦したんだね」

Point2 子ども自身の努力・工夫を認める

子ども自身が頑張った部分に焦点を当てて具体的に言葉にする。「結果」ではなく、「努力」や「工夫」した過程に注目する。

●「発表会まで一生懸命に練習していたね」

Point3 子どもに聴いていい

子どもが何を工夫したり努力したりしたのか、わからない時は、子どもに聴く。

●「工作を作るのに、どんなことをがんばったの?…そっか。粘土を細く伸ばしてネコのしっぽを作ったんだね」

Point4 できなかったところは、伸びるところ

できていないところ=「伸びしろ」と考える。

●「計算の練習を一生懸命やったんだね。間違えたところはどうしたらよいと思う?」

Point5 まるごと認める

時折、意識して「子どもの存在をまるごと認める」言葉もかける。

●「生まれてきてくれて本当にうれしい」

私たち教職員も様々な教育活動を通して、子どもとともに伴走し続けること、そして、子どもの頑張りのそばにいて、ポジティブな「認める」言葉かけをしていきたいと思っています。